

特集号

- 「西日本豪雨」救援ボランティア
- 原水爆禁止世界大会

府職の友

FUSYOKU NO TOMO

2080号 2018年8月10日

発行所/大阪府関係職員労働組合
〒540-0008 大阪市中央区大手前2-1-59
電話 06(6941)0351・内線3740
直通06(6941)3079 FAX06(6941)4541
Eメール info@fusyokuro.gr.jp
URL/http://www.fusyokuro.gr.jp
発行人/有田 洋明
編集人/小松 康則・越智 太一
(一部10円)組合員の購読料は組合費に含まれています。

府職労「西日本豪雨」救援ボランティア 25人が参加

ボランティア活動を通じて 学んで元気になった!

真備町のボランティアセンターで



緊急の取り組みでしたが、20歳代の青年から60歳代のシニア世代まで25人の参加のもと、府職労「西日本豪雨」救援ボランティアを取り組みました。8月3日(金)夜にバスで府庁を出発し、岡山市内で宿泊、4日(土)朝からボランティア活動を行いました。

被災されたお宅での支援活動

まずは、倉敷市災害ボランティアセンターを通じて、被害の大きかった真備町に入り、5人1組の班(計5班)にわかれて、被災者宅での復旧作業のお手伝いをしました。

みなさん自ら避難所に身を寄せながら、早朝から夕方まで自宅の復旧作業に従事されています。作業内容は室内や自宅周辺に溜まった泥のかき出し、室内の清掃、災害当時から手つかずになっている冷蔵庫や家具

また、ボランティアセンターでは、組合員・職員のみなさんにご協力いただいた救援カンパの一部を義援金としてお渡ししました。

猛暑の中での作業となりましたので「20分作業、10分休憩」というルールを守りながらの2〜3時間の作業でしたが、たいへん感謝され、やりがいを感じ、元気になれる取り組みとなりました。

核兵器のない世界をめざして

2018原水爆禁止世界大会

学んで真剣に考えたこと伝えたい

8月4日(土)〜6日(月)、原水爆禁止世界大会が広島市内で開催され、府職労から青年2名が参加しました。日本全国、世界各国から全体で6000人が参加し、海外の政府代表や日本国内各地の代表、世界中の反核平和運動のメンバーが「核兵器のない平和で公正な世界」をめざす決意を語りました。

開会総会・青年集会

開会総会では、広島市長のメッセージ、海外代表や国連関係者のメッセージとともに、被爆者の証言もあり、核兵器がいかに非人道的な兵器で人間が扱ってはいけないものであるかが語られました。

開会総会に続いて開催された若者の交流集会「RingLinkZero2018」では、海外代表の青年も自分たちの思いや活動を語り、交流しました。海外の青年の「無関心な人はいない。誰もが心の中何とかなしたい」と思っている。そんな人たちに私

避難所で楽しくかき氷

午前中の活動を終えたあと、バス内でお弁当を食べ、それぞれの活動を振り返って交流しつつ、汗や泥の汚れを落とすため温泉に立ち寄ったあと、倉敷市立第二福田小学校(水島地区)を訪ねました。

この避難所では現在も約1600人が避難生活をされています。現地のスタッフのみなさんのご協力もあり、かき氷と野菜ジュースを提供し、たいへん喜んでいただくことができました。とりわけ、子どもたちに大好評で、学童保育に通っている地元の子どもたちもいっしょに楽しみました。

この避難所でもみなさんこの避難所でもみなさんで最後と思っていたが、も

1600人が避難生活をされています。現地のスタッフのみなさんのご協力もあり、かき氷と野菜ジュースを提供し、たいへん喜んでいただくことができました。とりわけ、子どもたちに大好評で、学童保育に通っている地元の子どもたちもいっしょに楽しみました。

この避難所でもみなさんこの避難所でもみなさんで最後と思っていたが、も

もう一度参加したい

シニア世代の参加者からは「年齢的にもこれが最初で最後と思っていたが、も

今回参加を通じて、息長い支援が必要であること、をみんなが実感し、府職労



避難所でのかき氷は大好評

真実を知り学び、胸が痛くなる

2日目は、動く分科会「碑めぐり・遺跡めぐり」に参加しました。被爆者の当時のリアルな話を聞き、広島で何があったのかを現地で自分の足で回る分科会です。炎天下の中、原爆ドームへ向かう道中にもいろんな碑や遺跡が当時のままの姿で残っています。日常では感じられない戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさが、広島には「あの日のままの姿」で保存されて

「学校の授業やインターネットの情報だけでは何が起こったのかを知ることができない」と被爆者は語ります。そして、広島で何が起きたのか、それを隠そうとするアメリカや政府の圧力に負けず、被爆とたたかいながらも後世に語り継ぎ、残していくために、今ここに

「これが最初で最後」と思い、職場の仲間を誘ってボランティアに参加した。みんな初めてで、できることがあるのかと不安でしたが「みんなで行くからこわくない」と、少しの不安とワクワク感をもって大阪を出発した▼バスの中でグループ・マスク・軍手が配られ、使いこなせるか心配だったが現地ではこれがとても役に立った▼浸水で土壁が剥がれ落ち、むき出しになった竹の枠組みに付着した泥やゴミを掃除する作業は根気のいる仕事だった▼いろんな話を聞きながら「この家が再生し、家族そろって元の生活ができるようになるまで何年かかるんだろう」と思うと胸が痛んだ。それでも、少しでも前に進むようにと頑張る現地の方々の姿に触れ、逆に励まされ力をももらった▼猛暑の中の作業となったが、タイマーを使っている時間管理、こまめな休憩と水分補給、作業後の入浴など、いろんな気遣いと工夫があったので、私のような体力に自信のない人間でも最後までやり遂げることができ、とてもうれしく自信になった。そして機会があればまた参加したいという気持ちになった。今回の体験をいかしたい。(里)

爆心地の最も近くにある本川小学校は、倒壊せずに当時の姿を残しています。ここにある平和資料館にも足を運びました。

原爆投下の日、ここには約200人の生徒と数名の職員がいましたが、ほとんどの人が即死だったといえます。窓ガラスは溶け、銃はひしゃげ、壁には人の影が焼き付き、当時のままの姿を目の当たりにし、息をのみました。残ったわずかな人や住民の協力で1年後には授業を再開したというエピソードも印象的でした。

「学校の授業やインターネットの情報だけでは何が起こったのかを知ることができない」と被爆者は語ります。そして、広島で何が起きたのか、それを隠そうとするアメリカや政府の圧力に負けず、被爆とたたかいながらも後世に語り継ぎ、残していくために、今ここに

唯一の被爆国である日本が核兵器禁止条約に署名せず、会議にも出席しないこと、平和記念式典で安倍首相が「核兵器禁止条約」に「いさかい触れなかったこと」なども報告され、政府に対する非難の声も上がりました。

大会の最後には、軍事費を削り、福祉・教育を守り、被爆者、若い世代とともに「核兵器のない世界」を目指す運動を繰り広げ、2度とヒロシマ・ナガサキが繰り返されぬようにと「核兵器のない世界をめざす被爆国の決意」が採択されました。(3面つづく)

遊歩道

「これが最初で最後」と思い、職場の仲間を誘ってボランティアに参加した。みんな初めてで、できることがあるのかと不安でしたが「みんなで行くからこわくない」と、少しの不安とワクワク感をもって大阪を出発した▼バスの中でグループ・マスク・軍手が配られ、使いこなせるか心配だったが現地ではこれがとても役に立った▼浸水で土壁が剥がれ落ち、むき出しになった竹の枠組みに付着した泥やゴミを掃除する作業は根気のいる仕事だった▼いろんな話を聞きながら「この家が再生し、家族そろって元の生活ができるようになるまで何年かかるんだろう」と思うと胸が痛んだ。それでも、少しでも前に進むようにと頑張る現地の方々の姿に触れ、逆に励まされ力をももらった▼猛暑の中の作業となったが、タイマーを使っている時間管理、こまめな休憩と水分補給、作業後の入浴など、いろんな気遣いと工夫があったので、私のような体力に自信のない人間でも最後までやり遂げることができ、とてもうれしく自信になった。そして機会があればまた参加したいという気持ちになった。今回の体験をいかしたい。(里)